

となりの

母娘丼

今年社会人になってから数か月が経ち、
研修を終えた俺は以前から暮らしていた場所からは
離れた支店へと勤務することになり
実家を離れ一人暮らしをすることになった。

学生時代から実家を離れたことがなかったため
期待と不安が入り混じる。

そんな一人暮らしを始めて最初の朝、
部屋を出てアパートの廊下に出た瞬間
僕は瞬く間に目を奪われた。

「あっ、こんにちはあ、この前越してきた方ですよね？」

「は、はいっそうです…けど…」
そこには、とんでもない美人が二人いた。



「212号室ですよね？
私たちとなりの211号室なんです。
これからよろしくお願いしますね」

「そ、そうなんですか！
こちらこそよろしくお願いしますー！」



「ほら、リサ ご挨拶は？」



「……よろしく」

「もう……この子は……」

「ごめんなさいね、この子ったら愛想がなくなつて」

「いえっそ、そんな……」



「…すごい美人だったなあ…」

アパートから駅へと向かう道を歩きながら
先ほどの光景を思い出す。



明らかに日本人の容姿ではなかったけど
日本語ペラペラだったしハーフ…とかなのか…？
いや、なによりもあんな美人が隣に住んでて
しかも見送りまでしてもらえて…
ラッキーすぎるぞこれは！！



いやでも…たぶんあれは母親と娘…だったよなあ
姉って感じでもなかったし…ということとは…
とほほ…

それから数週間がたち

隣人の美人親子とはたまに顔を合わせ

奥さんとはすこし世間話をしたりする機会もあつた

奥さんの名前はマリさんと言うらしい

そして娘さんの名前はやはりリサだつた。

だいたい新しい生活にも慣れ始めて来たころ

ふつふつと湧き上がる気持ちが

抑えられなくなつてきていた。

とにかくムラツとくる…

隣の部屋にあの2人が住んでいて…

たまに見かけるとその美しい容姿と抜群のスタイルに
どうにかなつてしまひそうになる。

ただ、いつも見かけるのはあの2人で旦那らしき

人物の姿はまだ見たことがない。

たまたま活動する時間が合わないだけなのか
どこか遠くへ出て行つてしまつているのかそれとも…

とにかく、なんとか気持ちをおさまかそうと

また今日もレンタルビデオ屋で

洋モノAVを大量に借りてしまつた…

ただ、こうでもしないと気持ちが爆発してしまひそうで…

「なんかちよつと惨めだ…」

「あら？」

「…？」

「あは、やっぱり！偶然ですね」

「ま、マリさん?！」

「ふふっどうしてそんなびっくりするのよ?」

「あっ…すいません急だったのついで…!」

ふと見るとマリさんは買い物袋を手を下げていた。どうやら買い物帰りらしい。

それにしてもこれはラッキーだ。

マリさんと喋りながら帰れるなんて!

「そうよね、ごめんなさいね急に…!」

「あら?その袋…何か映画でも借りたの?」



「!!えッ…あっ…そう、ですねえ、はい」

しまった…浮かれてる場合じゃなかった…

俺は今、洋モノのエロビデオぶら下げているんだっ…!!
もし見られでもしたら…いや落ち着け、大丈夫。

中身を見られなければいいだけの話だ!

「そ、そんなことより荷物重そうですね!

マリさん僕が持ちますよ!!」

「えっ?ああ…そう?ふふ、ありがとう」

「い、いいえ!!」

マリさんの荷物を持とうとした時ふと気が付いた。
その指には指輪が付いていない。
なぜこんな簡単なことに気が付かなかつたのか…
ということはマリさんは恐らく…

「…? どうしたの?」

「あつ、いえ!なんでも…よつと」

「助かるわ ありがとう」



マリさんの荷物持ちをしながら
世間話をしているうち
あつという間にアパートまで辿り着いた。

「ありがとう、助かったわ

意外とスーパーからここまで長いのよねえ」

「確かに意外と距離ありますもんねえ
はい、荷物どうぞ…」

買い物袋を渡そうとした瞬間、油断してしまっていた。
片手で渡せばよかったものの、少し失礼かと思っ
レンタルバッグを握った手も差し出してしまった。

バラバラッ!!

受け取ろうとするマリさんの指に
レンタルバッグが引っ掛かり中身が散乱してしまった。

「あらっ！ごめんなさい……」

「あっ……」



「うわっ!!ごめんなさい!!」

急いで散らばったDVDを拾い集める

最悪だ…終わった…

せつかく少しずつ仲良くなってきたのに…
こんなの絶対幻滅される

「うっ…そ、それじゃあ!」

僕は逃げるようにして部屋へ駆け込んだ。

「…………はああ……」

部屋の扉にもたれ大きくため息をつく

今までみたいなおもしろい時間

今日が最後かもしれない……

そんなことを考えながらベッドに倒れこむ

……………

しばらく呆然としていた

30分、1時間と時間は立っただろうか

ピンポーン

インターホンの音に現実に引き戻される

「なんだ？宅急便か？」

重い足取りで玄関へ向かい扉を開けると
そこには目を疑う光景があった。

「ま…マリさん?!!」



扉を開けた先にはマリさんが立っていた。
どうして?何の用が?

「ふふっどうしたの?そんな驚いちやって」

「す、すいません…あの、その…」

「先ほどは失礼しました…気が動転しちゃって」

「あんなの気にすることないわよ

「男の子なんだし当たり前前よね」

うう…気にするなと言われても恥ずかしい…。

「は、はい…。ところで一体どうしたんですか?」



「ああ、荷物を持ってもらったお礼をしようと思って
はいこれ」

「えっ…そういえばなんかいい匂いが…」

ふと見るとマリさんの手にはお鍋が握られていた

「今日の晩御飯なんだけど、一緒にどうかと思って」

「僕ど…ですか?!」

「ええ、この前あなた、あまり料理はしないって

言ってたでしょ?今日はリサの帰りも少し遅いし

丁度いいかと思って」

「そ、それはもう…是非!!」

よかった…醜態を晒したことは事実だけど
少なくともマリさんは幻滅はしていないようだ…
それにこれからマリさんの手料理が食べられるなんて
落ち込んだり喜んだりすごい忙しい一日だ…

「ふふっよかった。それじゃあお邪魔するわね」



それから自分の部屋でマリさんと一緒に食事をした。

食事を食べ終わり、マリさんと談笑していると
マリさんは僕の隣へと移動してきた。

「ま…マリさん…?」

うわっ、すごいいい香り…と、うかが
近い!!すごい近い!

「せつかくお話ししてるのに机挟んでなんて
なんだか他人行儀じゃない?」

「は…はあ…」

いやそりやそうかもしれないけど…

こんな近づかれたら俺は…

と、うかなんだか胸のあたりが温かいし気持ちいい

って…お…つぱいが…!!

びびるっ♡

うう…やばい

このままじゃ理性が吹っ飛んでしまう…

「どうしたの？ 顔真っ赤よ？」

「いや、その…」

「ふふっ…ところで、さっき落としたビデオ全部外人さんのビデオだったね」

「へっ?! あ、えーと…それは…」

「もしかして私たちのことを意識してるの?」

「いや…その…ちがつ…いや…」

「…そ、そうです…なんと…うか、ごめんなさ…」

「あははっ、ほんとにそうなんだ

ところでどっちを特に意識してたの?

リサ?それとも…」

「そ、それは……マリさん、です…」

「へえ…じゃあ私のこと考えながらいつもビデオで？」

「いや…その…」

「ふふっ…ごめんね困らせちゃった？

でも、わたしも実は君のこと、

結構いいなと思ってたのよ？」

「えっ？」

「…これは…」



「気になる人がこんなに近くにいて
君は何もしないの？」

リサが返ってくるまでまだ時間があるんだけどなあ」

「ゴクッ…」

これは夢か…？

そんな…本当にいいのか…？

相手は子連れで…いや、でも…

もうどのみち自分を抑えられない…!!



「あっ……んっ……♡」

ク
チ
キュ
♡

うっ…マリスさんの唇…めっちゃやわらかい!!
ぷるぷるでしっとりして…

「んっ…♡くちゅ…はっ♡」



唇に伝わる感触とマリさんの甘い声に
たまらない興奮と幸福感が湧いてくる

「ぷはっ♡…はあ…♡

ふふっいきなりキスなんて大胆ね♡」

「マリさんがエロすぎるんですよ

あんなに誘惑されたら誰だつてがつついちゃいます」

「あらそう？ちよつどううれしい♡」



「あはっ やっぱりカチカチ♥」

「うあっ…マリさんそこは…っ」

マリさんは嬉しそうに

僕を見つめながら

ズボンのファスナーを下していく

ナニナニっ♡



「すごい♡こんなにおっきくなってる♡」

マリさんの手…意外と柔らかくて握られてるだけでも射精できてしまいうだ

ぐっ♡…♡



「うっ…」

マリさんの手が僕のものをしてしごき始める。
手つきは手慣れている、
強すぎず弱すぎず、亀頭への刺激も時折混ぜてくる。

「どう？気持ちいい？♡」

「は、はい…そりゃもう…あうっ」

「あはっ♡」

君って結構感じやすいのね♡」

♡
♡
♡

♡
♡
♡

「すごい♥おちんちんビクビクさせて…
我慢汁で音もしてきたね♥」

「はっ…マリさん…すごい気持ちいいです」

僕がそう言うのとマリさんは嬉しそうに
いつそう手の動きを速めていく。

キュン♡

ワクワク♡

「ごんごんお汗が出てきてビクビクしてる♡
もう出ちやいそうなの?♡」

「くうっ…はいつ…」

マリさんの手コキ気持ちよすぎて…

もう…我慢できそうにないですっ

「ぶふっ♡いっ♡いっ♡ぱいっ♡」

グニッ♡
チュ♡

グニッ♡
チュ♡



「うっ!!」

「あっ♡」

射精と同時にどてつもない快感が
頭のなかを走り
無意識のうちには体が
痙攣してしまっていた

ド
ク
ク
ク
ド
ク
ク
ク



「ふふっ♥すごい勢い♥
顔にかかっちゃったじゃない♥」

「はあ…はあ…ご…ごめんなさい…
気持ちよすぎて…何も考えれなくて…」

ものを包むマリさんの
手の感触が、射精後の
程よい余韻を感じさせ
その心地よさにまたドクドクと
精液が溢れ出てくる

「すごい、どんどん溢れてくる♥」
「まだまだ収まりそうにない
みたいね♥」

僕とマリさんはお互いに服を脱ぎ
ベッドへとなだれ込んだ。

ドクドク…

ドクドク

「あんっ♡ほら、焦らないで♡」

僕はマリさんの体に覆いかぶさり
挿入の態勢に入る

マリさんの体はすごく柔らかくて
お尻の感触や二の腕の柔らかさだけで
何度でも射精できそうだった

「じゃ、じゃあ…挿入れますね…」



マリさんの膣内の入り口にペニスを突き刺していく
マリさんのおマンコは
するするとぼくのものを飲み込んでいった

ズッ
グッ
ッ



「はっ…あッ♡」

ヌプ
ヌプ…
スプ♡

マリさんの中はヌルヌルですごく柔らかくて、
でもしつかりと締め付けがあつて
めちやくちや気持ちよかつた
挿入感を味わつた後、僕は夢中で腰を振り始めた。

「あっ♡んっ♡…♡すっ♡い…♡固…♡いっ♡んっ♡」

腰をつくたび漏れる彼女の声に
興奮がどんどんと加速されて
快感もより一層強くなっていた



「あんっ…そこっ♡♡いい…あっ♡♡」

ぐっ♡♡

「お母さん♡♡」

激しく揺れる
おっぱいを鷲掴みにする
指が吸い込まれるような柔らかさで
強く揉みこむとマリさんの反応が変わって
僕をより興奮させた

グググ
チュッ
チュッ
ズ
ズ



「んっ♡ああ♡あっ…あんっ♡」

んっ♡

下半身にじわじわと
快感がこみあげてくる

「マリさん…僕、もう…っ」

「あッ♡いいよッ♡」

私も…あっ♡♡…限界♡」

ズッ♡
グッ♡
♡

ズッ♡
グッ♡
♡

ズッ♡
グッ♡
♡



「んんっ♡♡♡♡」

「んんっ♡♡♡♡」
「んんっ♡♡♡♡」

「んんっ♡♡♡♡」

マリさんの膣内の一番奥に
ペニスを押し当てながら射精する
これ以上にならないほどの量の精液が
出ているのが自分でもわかるほど
強烈な快感だった

ペニスの動きに合わせてビクビクと体を震わせる
マリさんが愛おしくてたまらなかつた



「はあ…♡はあ…♡」

「はあ…ま、マリさん…」

「んっ♡どうしたの?」

「その…大好きですっ!」

「あはっこのタイミングで?

ありがとう♡

これからも時間を見つけて会いましょうか」

「は、はい!」

こうして僕とマリさんはたまに一緒に出掛けたり家事をしてもらったり、そして体を交える関係になった。



数日後

「んしょっ…ふふ♥これぞらっのっ?」

「は、はい!最高です!」

ムキムキ♥



「すごい♥ガッチガチ♥

さすがこのために休みを取っただけあるわね」

「そりやあもう何日もお預けでもう限界ですよ」

「あははっ正直ね

じゃあ今日はいっぱい気持ちよくしてあげる♥」



「んっ…男の子ってほんとにおっぱいが好きね」

グッ♡

チキッ♡

グッ♡

マリさんの特大おっぱいで
パイズリしてもらえるなんて
生きててよかった…!!
想像以上の気持ちよさと
ビジュアルのエロさが相まって
今にも射精してしまいそうだ

「マリさん、少し強めに挟んでもらってもいいですか?」

「うう? あっ♥びくってした♥」

「うっめちやくちやいいです...おらうかも...」

グ
イッ

ズ
ミ



ズ
ミ
♥

グ
キ
♥

「うッ！」

「んっ♡ ふふっ…すぐ出ちやっただね
そんなに気持ちよかったの？」

ド
グ
ッ

ド
グ
ッ

あまりの気持ちよさに
頭が真っ白になる

おっぱいの柔らかさで
包まれながらの射精が
こんなに気持ちいいなんて…

「うわっすごい量♥あったかい…♥
気持ちよかった?」

「はい…もう大満足です…」

「よかった♥それじゃあ次は
私を気持ちよくしてね♥」

どろろ…



「んっ♡はあ♡相変わらずすごい固さ…♡」

「今日までオナ禁させたのマリさんじゃないですか
そりゃガチガチにもなりますって」

「あらそうだった？」

でも私固いのが好きなの♡」

アッ！♡

マリさんは僕の上にまたがると
あつという間に
ペニスを飲み込んでしまった

「あっ♡んっ♡…はあ♡」

マリさんは小刻みに腰をうねらせ始めた
腰の動きに合わさる
淡い刺激とお尻の感触が
なんとも心地いい

腰を動すごとにマリさんの声は
どんどんと甘くなっていた

ぷる♡

ワキゅ♡

アキゅ♡



「あッ♡」

ふるふると揺れるおっぱいを
下から持ち上げ、揉みしだく
手から零れ落ちてしまうほどの大きさと
その柔らかさにいつまでも揉んでいたくなる

ジーン♡

おっぱい♡

アキアキ♡

ワキョ♡



「んっ♡はっ♡…あぁ…っ♡」

マリさんの腰のスピードが徐々に上がってくる
それと同時に中の締め付けも
より一層強くなっていく

グニィ♡

んみ♡

グニィ♡
フニィ♡
ハニィ♡



「あツ♥いいっ♥もう…イツちやいそう♥」

「ぼくももう…出ちやいそうです…」

「いいよ♥今日は大丈夫な日だから
膣内で射精して…♥」

マリさんの膣内は僕を射精させようと
やわらかな肉壁で一層強く締め付ける

ぎゅっ♥

バクユ♥
ググ♥
ググ♥





「はアツ♥♥♥あツ…♥♥♥あぁ…♥♥♥」
「うツ…!!」

♡…♡…♡…♡…♡

♡…♡…♡…♡…♡
♡…♡…♡…♡…♡
♡…♡…♡…♡…♡

「はあ…はあ…
すごい、なかでビクビクしてる♡」

「まだまだ時間はあるしじっくり楽しみましょう♡」

ぽろぽろ…

はあ♡

はあ♡

それから夕方まで
何度もマリさんの膣内に射精した

数日後



ある日、マリさんと帰りを共にしていると、
複雑そうな顔で相談を持ち掛けてきた。

「あの、ちよつと聴いてほしいんだけど…」

「…？、どうしたんですか？」

「リサのことなんだけど、あの娘って
なんだか男の人が苦手みたいなのよ」

「ああ…そういういえば初めて会った時も

ちよつと顔を合わせたときも

すごいそっけなかつたような…」



「そうなの、別にだから何ってわけではないんだけど

もし失礼なこと言われても気にしないであげてほしいの」

「わかりました、大丈夫ですよ。」

「ありがとう、でもこれはきつと私にも原因があるのよね…」

「…？」

「お母さんー！」

「あ、あらリサ 今帰り？」

「うん、今日は部活早めに終わったの…あつ」

う…なんだかすごい目でこっちを睨んでる…

「う…くん…んにちは…」

「…お母さんお隣さんと話してたの？」



「え、ええ この人ね、とても親切なのよ？」

「ふーん…どうだか…」

「こら、リサ… その、ごめんなさいね」

「さ、お母さん早く帰ろっ」

マリさんは娘さんに手を引かれてそそくさと
離れて行ってしまった。
申し訳なさそうな顔のマリさんに
軽く手を振って見送った。

…確かにあの子は男を嫌い…
というか警戒してるような
そんな感じがあるなあ。
やっぱりお父さんが一度いなくなっているから
あまりいいイメージがないのかもしれない…。

僕は回り道をしながら
家へと帰った。

それから数日後の帰り道
すこし離れたところでリサちゃんを見つけた

なにやら人と並んで歩いているようだけど…
なんだか変な雰囲気だぞ…？

「ちよつと、どこまで付いてくる気ですか?」
「いいじゃん!ちよつと!ちよつと!ちよつとだけだからさ
これから遊びに行こうよ」

「だからそんなつもりはありませんから!
もうついてこないで!」



「…どうやらナンパされてるみたいだ…
どうしよう助けるべきか…?
でも俺が行って何をすればいいんだ…?
…えらい!もうどうにでもなれ!

「お、おう〜さとみくお帰り〜」

「は、はあり!!……あつ……お……お父さん!」

よ、よし。一瞬わけわからないうって顔してたけど
意図は伝わったみたいだ。

「ん?友達か?」



「……チツ」

舌打ちをして男は去っていった。

「…はあ…つて、誰がさどみですか?！」

「うっ…ごめん!咄嗟に出たもんで…」

「でも…助かりました。正直ちよつと怖かったし…」

「いや、助けになれてよかったよ。」

「まだあいつがうろついてるかもしれないし
このまま一緒に帰ろうか?」

「いえ、結構です。私コンビニよつてから帰るので」

「いや、やっぱり送るよ。万が一があつたら僕も嫌だしさ」



「え…そ、そうですか…ありがとっつてさっさと」

それからリサちゃんと一緒にアパートまで帰った
出迎えたマリさんは少し驚いた顔をしていただけ
事情を説明するとお礼を言われた。



それ以来、少しリサちゃんとの距離が縮まり
帰り道が一緒になれば話しながら帰り、
挨拶も交わす中になった。

そしてある日、マリさんから一本のメールが届いた

今日明日と仕事でどうしても帰れそうにないの
リサが一人になっちゃうのはかわいそうだから
今日の夕飯だけでも一緒に食べてあげてくれない？
リサもあなたをきっかけに
男嫌いを克服できるかもしれないし…
リサにはもう言っているから…お願いね！

ま…マリさんも急だなあ…

まあでも、正直なところマリさんとの
これからの関係を考えたら
リサちゃんとも仲良くなっておいたほうが…
すごい不純な考えだけど…

よし、ここは一肌脱べよう！

「ご、ごんばんはあ…」

「マ、…お母さんから話は聞いてます

なにか適当に出前でもとれって言うてました」

「そ、そっか。じゃあ何にしようか

ピザ…とか?」

「ピザ! いいですね! あっ…」

「あはは、リサちゃんピザ好きなんだね

それじゃあピザにしようか」



「うう…はい」

はしやいでしたまったことを恥ずかしがっているようだ
やっぱりまだ思春期って感じなのかな…

男が苦手っていうのもこの年頃特有のものなのかも…

「はあく、おいしかった
ごちそうさまでした」

リサちゃんはピザを食べ終えて
とても満足そうな顔をしている。
以前までならこんな顔は
僕の前ではしてくれなかっただろう。

だいぶ距離が縮まったってことなのかな。



それからしばらくくりサちゃん和学校での話や愚痴を
聴いてあげた

「ふう、それじゃああんまり遅くまでいても悪いし
僕はそろそろ…」

「あつ…ちよ、ちよつと待って…」

「え?どうしたの?」

「え…つとそその…相談があるんです…」

「相談？ああかまわらないよ、話してみて」

「いや、ごじじゃあ話しづらいというか…私の部屋で…」

「…へ？」

「どうどういうことだ？」

「リサちゃんの部屋じゃないと話せないって…」

「そもそも部屋である必要はあるのか…？」



そんなことを考えているうちに

リサちゃんは部屋のほうへと歩いていく
そしてなんとなくついて行ってしまった

「どうぞ」

ピンクを基調にしたかわいらしい部屋で
化粧品の甘酸っぱいにおいが部屋に立ち込めている

「座るところ、ベッドしかないですけど
遠慮しなくていいので」

「じゃ、じゃあ…お邪魔します…」



リサちゃんのベッドに腰を掛ける
部屋に招き入れるなんて
何か見せたいものでもあるのだろうか…？

すこし部屋を見まわしていると、
お腹に何かもたれかかっていた

「?!」

な、なんだこれ…?!

リサ…ちゃんがなんで俺の上に座ってくるんだ?!

と、と…いかめちやくちやいい香り…いや、そうじゃない!

「り…リサちゃん…?」



「…私男の人って少し苦手だったんです

小さいころにパパ…お父さんも出て行っちゃったし

話す機会があまりなくて…

でもあなたと世間話したり学校の話したりしてると

お父さんってこんな感じだったのかなって思ったりして」

リサちゃん…もしかして僕に
お父さんの影を重ねてるのか…
そうだよな、いつもツンとしてるけど
お父さんに甘えてみたかったんだろう…

「それでね…その…」

「あなたのこと…パ…パ…って呼んでも…ら…ら…」

「えっ!」

「だめ…?」

「うっ……か、かまわないよ」



「パ。パ。パ。♥…ふふっ」

うっ…すごい甘い響きだ…

リサちゃん実はめちやくちや甘えん坊なのか…？
けど、勢いで了解してしまっただけど

よかつたのかな…でもすごく喜んでるみたいだし…

まあでもリサちゃんが僕に父親の姿を求めてくれるなら
もしかすればマリさんとの関係も次の段階へ…



「り…リサちゃん、それで話って…」

「リ・サ！呼び捨てにして！」

「あ、うん。り…リサ、それで要件っていうのは…」

「うん、あのね…」

リサとキスしてほしいのー！

「はり？」

「…いや?」

「いや…:というかその

ちよつと待って!そういうのは好きな人と
するべきとどうか…:相手を選ぶべきとどうか…:」

「リサはパパが好きなの!

…だからね…:お願い♥」



うっ…:なんだこれは…:

予想外すぎるぞ…:どうすればいいんだ…:

相手はまだ学生だ…:それにマリさんとの関係は…:

いやでもここで断ればリサちゃんはどうなるんだ!?

…リサちゃんは自分に父親を重ねている…:

ならこれは父として娘の願いを聴くことであり

断じて不純な行為ではない…:そうだ!そのはずだ!

「リサ…」

「んっ♡♡」

リサの唇はマリさんの唇とは違い
すこしハリがあつて弾力が強かった

あつゅっ♡



「はっ♥んちゅ♥…ぱぱあ♥」

呼ばれるたびになんともいえない
背徳感に襲われる
リサの口はそんなことはお構いなしに
激しく求めてくる

ちゅ♥

んちゅ♥

ん♥

ぱ…♥



「んむっ♥ぱぱあ♥おっぱいも触ってえ♥」

…ここで引かなければたぶん最後まで行ってしまう
でももう…止められそうにない…!!

ちゅちゅらー♥

ぐちゅちゅ♥

ちゅ♥



「あっ♥」

マリさんよりも少し小さめだけど
弾力があってめっちゃくちゃやわらかい…

ゴキウ♥



「パパ…もつと強くう…♥」

服越しに指の力を強め
リサの胸の感触を楽しむ

胸の感触とリサの首元から香る
独特の女の匂いに自分のものは
もうはち切れんばかりだった



「パパ…お尻に固いの当たってる♥
リサもパパの触りたい…」



「すごい…」

リサでこんなにおつきくしてくれたんだ♥」

「リサ、舐めてみて」

「うん♥」

「ごお……?」

「ああ、すごい上手だよ……どんどん舐めてみて」

「ん♥はあ……♥」

一生懸命にものをペロペロと舐める姿に
たまらない制服感を覚える
柔らかく、でも少しぶつぶつとした感触が
僕の気持ちをより高ぶらせる
「いいよ、リサ それじゃあ次は啜えてみようか」

れろお♥
うま♥
うま♥
うま♥

「んっ…♡はぁ♡おっひい…♡」

「くあっ…リサの口の中…すぐくあったかいよ」

か

ぽっ♡



「それじゃあパパのおちんちん
ちゅうちゅうしてみて」



「じゅっ…♡じゅぶっ♡はっ…♡んじゅ♡」

「そう…上手…次は口も手も動かしてみて」

「ほんな…んっ♥はんひ…?んぶっ♥」
リサのフェラチオはまだぎこちなく
歯が当たって少し痛んだが
柔らかな舌と唇とのコントラストが
とても気持ちいい

ふと見るとリサの
献身的な動きが愛おしく
その背徳感とフェラによる快感で
すぐにジンジンと快感が湧き上がってくる



「リサ…もうそろそろ…ッ」

「ぶじゅ♥んぶ♥ひいよ♥だひて♥」

ちゅぽ♥

ぐいゅ♥

ぽいぽい♥
ズル♥

「いくよりサ…顔で受け止めて…!」



「ぷはっ♥♥♥」
「ううッ…!」

リサのキレイな顔を精液が無秩序に汚してく
その快感がさらに射精の勢いを強めていく



「はあ…はあ…あつたかい…♡
ねえパパ、リサ上手にできました?♡」

どろろお…♡

はあ♡
はあ♡

「ああ、上手だったよりサ…」

ドロドロに汚れたリサの顔はとろんとしていて
僕の征服欲をどんどんと刺激した



ぷる

ぷる

クチ…♡

むに♡

リサを上にもたがらせ
彼女の入り口に
ペニスを当てる

リサの体は
緊張しているのか
少し震えていた

「リサ、大丈夫？
挿入れるよ…」

「んっ…大丈夫…きて…♡」



ほ...♡

ズググ...

少しずつリサの腰を
おろしていく

リサはペニスが膣内に
挿入されていくにつれ
歯を喰いしばり
吐息を漏らしていた

「パ...パ...♡」

「もう少しだよ、がんばって」



はー♡

ゴクッ♡

ゴクッ♡

ズ

グン♡

リサの中にペニスがすべて
入り切った
リサの中はとっても暖かく
きゆうきゆうとしていて
マリさんとは
まったく違う感触を
味あわせてくれる

「はー♡♥はあ…
やっとな繋がった…♥」

リサは大きく息を荒げながら
必死に僕の体へと
しがみついていた



又干…♡

ク干…♡

リサはしばらくして
息が整うと少しずつ
腰を動かし始めた

膣内も少しずつ柔らかくなり
僕のペニスにヌルヌルと
まとわりついてくる

「んっ♡はっ♡パパあ♡
気持ち…いい？」

「すごく気持ちいいよリサ」

「よかった♡あんっ♡」

リサの腰のスピードは
より快感を求めるように
少しずつ上がっていった



「パパ♥パパあ♥」

リサが喘ぐたび
膣内のしまりがきつくなり
その快感にどんどんと
精液が尿道に
たまってくるのがわかる

「リサ、もうそろそろ限界だ…っ」

「あっ♥リサも…もう
きちゃう…っ♥」

はっ♥
はっ♥

はっ♥

はっ♥

バチゅ♥
びゅ♥

ちゅ♥

ぐゅ♥



ビクビク♡

ビクビク♡

ドクンツ

ドクンツ...

「はアツ♡ああ...♡はあ...♡」

リサの膣内が
根元から吸い上げるように
ペニスを締め付ける
その強烈な快感に
僕もたまらず射精した

「パパのおちんちん
リサの中でビクビクしてるの
わかる...うれしい♡」

「もっとしてえ♡パパあ♡」

ギョッ...

リサと夢中で体を重ね続け
気が付けば朝になっていた

「リサ、もうゴムがないし
それに学校もあるだろ…そろそろ…」

「いやあ♥
もつとパパと一緒にいるのお
学校も休むからもつとしてえ♥」

そう言いながらリサはおまんこを
ひくつかせ

愛液をだらだらと垂らしている
「でもリサ、ゴムが…」

「大丈夫な日だからあ♥
挿入れてえ…♥」

だ、大丈夫か…？

うっ…しかし、生でできると思うと
だいぶ落ち着いてきたのに
どんどん股間が膨らんできて…

「ああ…♡♡」

は…ん♡

あ…♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

気が付くと
僕はリサの中に
挿入してしまっていた
リサの膣内は
ぐちよぐちよに濡れていて
ペニスを求めて絡みついてくる

「ああ…♡いら♡パ♡パ♡
もっ♡お♡♡」

あ♡
はあ♡

ほ♡
ん♡
ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡
ん♡

リサのおまんこは
僕のピストンに合わせて
ぐちゅぐちゅと下品な音を立てる
蒸れた匂いが部屋中に充満し
興奮をより高め
腰をふるスピードが上がる

「あッ♥パッ♥はあっ…んっ♥
おちんちん気持ち…っいいよお♥」

ドキュ♥
ググ♥
ググ♥
ググ♥

びんっ
びんっ

リサの膣内は
より一層きつく絞まり
愛液で満たされたその感触に
亀頭が刺激され
腰が抜けそうになる

「んんッ♥はあッ♥
またイっちやう♥…あッ♥あんっ♥
パパ♥パパあ♥」

はあ♥
はあ♥
がーっ♥

ズッ♥ポッ♥
ポッ♥
ちゅ♥

リサの中の絞まりが
どんどんと強くなる
それに合わせて
じわじわとこみ上げてくる快感を
リサにぶつけるため
腰の動きをどんどんと速めていく

「はあッッ♥♥♥アッ…♥♥♥はあ♥♥♥あ…♥♥♥」



射精と同時に
リサの子宮口が龟头に吸い付き
精液を最後の一滴まで絞りとりとうとする
吸い付かれるたび何度も何度も
尿道を精子が通り
あまりの快感に腰が震える

「はぁ…はぁ…❤️」

最後の一滴まで精液を出し切る
リサは足を震わせ息を上げている
射精の余韻に浸ったのち
ずるずるとペニスを引き抜く



「はぁ…♥はぁ…♥んっ…
パパだっすね♥」

それから歯止めが利かなくなり
マリさんが返ってくる時間まで
ずっと体を重ね
リサの膣内に精子を注ぎ続けた



そのあと、二人で一緒に休み

リサと一緒にマリさんの帰りを待ち出迎えた。

帰宅したマリさんは、仲良くする僕とリサに
安心した様子だった。

しかし、僕は胸が痛んでしよがなかった。


結局リサに押し切られる形で関係を持ってしまったが
マリさんにはとても言うことはできないし
これからどうするべきなのか

一度一人でしつかり考えて答えを出さなければ…

そんなことを考えながら二人の部屋を後にした

しかし、この問題は次の日の朝に

すぐに僕に降りかかってきたのだった

A dimly lit living room with a table, chairs, and a window. The room is dark, with light coming from a window in the background. The window has a wooden frame and light-colored curtains. In the foreground, there is a table with a white tablecloth and a green chair. In the background, there is a white cabinet and a potted plant.

次の日、僕はリサと共に
マリさんから部屋に呼び出されていた。

先日リサと関係を持ってしまったことが
さっそくバレてしまったのだ。

「……………はあ……」

「……………」

部屋に重たい空気が流れる
自分からはとても口を開くことはできない

「ゴミ箱にゴムが入ってたわ…これはそういうことよね…?」

「たしかに私は二人に仲良くなっただけでほしかったけれど…
どういうつもりなの?」



「そ…それは…」

「…違うのお母さん!私が悪いの…!」

「え?」

「私、知ってたの…お母さんたちがそういう関係だった…」

「…」

「最初は応援しようって…でも
パ…この人と一緒にいると楽しくて…安心できて…
本当にお父さんみたいで…」

「リサ…」



「初めて男の人を好きになれたのに…お母さんに盗られちゃうって…
またお父さんがいなくなっちゃうかもしれないって…思ったら…ぐすっ」

「……………そうよね…リサ…ごめんなさい」

「私のせいであなたには寂しい思いをさせてしまったのよね…」

「わかったわ。リサとあなたの関係、認めるわ」

「お母さん…」

「でも、私も引くつもりはないわよ?」

「え?」

「だってわたしも大好きなんだもの」


「わ、わたしだって…パパのごとだいすきだもん!」



「パ…あなた一体リサにどんなこと吹き込んだの!」

「い、いや!!違います!これはリサが…!」

「あははははっ」



一時はどうなることかと思っただが
マリさん、リサ、ともに納得のいく形で
落ち着けたようだ。
しかし、この一件は自分の優柔不断さが
招いてしまったことだ。本当に反省しなければ…。

その日からぼくたち3人は共同生活をおくることになった。
家族のように食事を一緒にとり、休日は3人で出かけ
なんでも一緒にするようになった。

そう、なんでも…

「アロシ♥パン♥パン♥ひゅんぷんぷん」

「ぷんぷん♥すんぷんぷんパンパンに膨れてる♥」

アロシ

れろっ♥

二人は僕のペニスをぺろぺろと丁寧に舐めまわし
蒼い瞳で僕を見つめる
その表情には興奮せずにはいられない。

「レロレロ♥あはっ♥パパってカリ舐められると
ぴくってするのね♥」

「うふふ♥そうみたいね、一緒にもつと舐めてあげましょっ♥」

二人は僕のカリ部分を重点的に舐めまわす。
射精の感覚とはまた違う快感が頭をピリピリと突き刺してくる。



「んちゅ♥はっ♥おいし♥」

「どんどん亀頭が膨らんできてる♥
シヨシヨしてもっと気持ちよくしてあげなごやね♥」



亀頭を二つの舌で舐められながらシゴかれ
そのたまらない快感に頭がどんどん真っ白になっていく

「レロお♥あつ♥すごいビクビクしてきた♥
もうイきそうなんだ♥」

「んちゅ♥はっ♥いつでも射精していいのよ♥」

二人は快感にもだえる僕を嬉しそうに見つめながら
刺激を強めていく
たまらず我慢の限界に達し、ビクビクとペニスが痙攣しだす



「あんっ♡♡♡♡」

「んっ♡」



龟头を刺激され続けたペニスは
どんどんと精液を吐き出していき
彼女たちの顔を汚していった

「あんっ♡♡♡♡」

「んっ♡」



膨らみ切ったペニスは痙攣とともに
どんどんと精液を吐き出していき
彼女たちの顔を汚していく
二人がとろんとした顔で精液を受け止める姿が
たまらなくエロかった



「ふふっ♥まだぴくぴくしてる♥」

「すごい匂い…♥まだまだまだ足りないみたいね♥」

♪…

♡♡

♡♡

「ほら横になって♡」

「は、はい……うぶっ」

「ふふっ♡ほーら、大好きなおっぱいだよ♡♡」

「あ♡男の子なのに乳首固くしてる♡
いじってほしいのかな?♡」

「ん……んむう……」

ゴニョ♡

スリー♡

スリー♡

ゴニョ♡

むにゅ♡

おっぱいのふわふわな感触と
乳首をすりすりとなでる感触に
夢中になると
突然ペニスが柔らかな感触で包まれた

「もうっお母さん!あんまり
パパをイジめちゃだめだからね!」

「うふ♥はいはい…んっ♥」
僕はマリさんのおっぱいを夢中で吸い始める
「ふふっ♥おっぱいおいしい?」
乳首もどんどん固くなってきてる♥」

ブルン

ギョウギョウギョウ

ムム

ムム

ちゃっぴっ♥

ちゅっ♥

ちゅっ♥

「むう…お母さんばっかり…
あたしのほうが気持ちよくなってるからね!」

リサが自分のおっぱいを使って
ペニスをしごいてくる
リサのおっぱいはハリがあり
程よい刺激に包まれる

「んっ♡ふふっ♡
リサ、パパ、すごい気持ちいいみたい♡
どんどん息が荒くなってる♡」

おっぱいを吸いながら
乳首をいじられてパイズリまでしてもらえるなんて
ここは天国か…!!



「あっ♥すごい♡い♡どん♡どん吸う力が強くなってる♥」
快感が増すごとに無我夢中で
マリさんのおっぱいを貪る

「あっ♥おっぱいの中で
すごいビクビクしてる♥」

パチュ♡

フネ♡

コネ♡

ちゅー♡
ちゅー♡

じゅ♡

ちゅー♡
ちゅー♡

ズッ♡

ズッ♡

パイズリのとろけるような気持ちよさと
乳首を擦られる刺激に
あっという間に射精の波がこみあげてくる



「ウツ……!!」
リサにみっちりどペニスを包まれながら
おっぱいの中に射精する
上も下も快感にまみれていて
射精の快感が止まらない

「ずぶっ♡♡♡んんん溢れてくる♡♡♡」

「あらあら♡いっぱい射精しちゃって…
よっほど興奮してたのね♡」



「うふ♥
リサと私のおっぱい、たっぷり堪能できたね♥
精子もいっぱい出せてえらいえらい♥」

「今度するときは
私がおっぱい吸わせてあげるからね、パパ♥」

射精の余韻に浸りながら
マリさんのおっぱいをしゃぶっていると
またリサに怒られてしまった

ヌトオ...♥

ぱー♥

ぷっ♥

ぷっ♥

なぞ♥
なぞ♥
なぞ♥

僕は二人の体を重ね合わせ
リサのお尻をつかみズルズルと挿入していく
リサのおまんこはもうぐちゅぐちゅに濡れていて
僕のペニスは飲み込まれるように
膣内へと挿入されていた

「あ♥パパあ…♥」

あ…♥

「リサ…気持ちよさそう♥」

ほち…♥

ほち…♥

ズプン♥

むっ♡ん♡♡

ぎゅ♡ん♡♡

リサの膣内の感触を味わうように
ゆっくりと腰を動かす

「んっ♥あっ♥パ。パ。の…おっあ…よお♥」

「リサ、パ。パ。のおちんちんきもちいいの？♥」

「あっ♥きもちいいよお…はっ♥」

「ふふっ♥おすっパ。パ。♥」

フキ…♥

ズ…♥

ぐ…ちゅ…♥

に…ちゅ…♥

む…にゅ♥

あ…っ…♥
ふ…っ…♥

にゅ…♥

リサの膣内が執拗にペニスに絡みつぎ
吸い込むように絞めつける
徐々にこちらの腰のスピードも上がっていった

「はッ♥ああッ♥ん♥はあ…ああッ♥」

「リサすごい濡れてるのね、音がすごくエッチだよ♥」

「いやあ♥言わないでえ…んっ♥
…恥ずかしいよ♥」

ほま♥

ほま♥

ズグ
ズグ♥♥

パグッ

ズ♥

バグッ
ズグ♥



「あっ♥んん♥ママあ♥」

「あらあら♥リサったら本当に甘えん坊ね♥んっ♥」
リサとマリさんが
身体を重ねながら舌を絡める姿に
得も言えぬ背徳感と征服感が
僕の心を満たしていく



「あんっ♥あッ♥パパあ♥もつと奥…きさてえ♥」

「んっ♥レロッ♥リサ…♥」

リサの子宮口めがけて
白いお尻に腰を目いっぱい打ち付ける
リサの絞めつけと背徳の快感で
股間に熱いものがこみあがってくる

あ…♥

ちゅ♥
わっ♥

と♥

ズッコ♥

グッポ♥

ズッコ♥

ズッコ♥

グッポ♥

ズッコ♥



「はッ♥♥あっ♥♥ママあ♥♥パパあ♥♥
リサ…もう、イっちゃ…ッ♥♥」

リサの膣内が激しく絞めつけと緩和を繰り返して
僕のペニスをより強烈に刺激する

「リサ…僕もそろそろイきそうだ…ッ」

は♥♥

あ♥♥

は♥♥

ズ♥♥

ズ♥♥

ズ♥♥

ガ♥♥

ズ♥♥



「アッ♥♥♥はあっ…♥♥アッ♥♥♥はっ♥♥」
「んちゅっ♥♥リサ…♥♥」
「パパあ♥♥ママあ♥♥…大好き♥♥」



リサは体を震わせながら
マリさんの手を強く握りしめていた



「んっ…はぁ♥」

はぁ♥

んっ♥

「んっ♥」

「めっ♥」

もぎ♥

ズ

イっ♥

「んっ♥」

「あっ♡…んん♡」

「んっ♡あんっ♡」

むぎゃ♡

ほき♡
ふに♡

は…♡

ほ…♡

もみ♡

ぎゃ♡

キュン♡

キュン♡

ぐちゅ

仰向けに並んだ二人がこちらを
とろんとした目で見つめる
マリさんはものほしそうにしているが
僕はそれを少しじらしつつ
二人のおっぱいの感触の違いを楽しんだ



「はっ♡♡♡アナタ♡♡♡そろそろ♡♡♡んっ♡♡♡」

はっ♡♡♡

はっ♡♡♡

キョッ♡♡♡

キョッ♡♡♡

「あッ♥♥♥あんっ♥♥♥固…い♥♥♥あっ♥♥♥」

ぐんっ♥♥♥

マリさんの膣内は焦らされた分
激しくヒダ肉を絡ませてくる

まっ♥♥♥

「パパあ♥♥♥もっとな強く握ってえ♥♥♥」

は♥♥♥

ん♥♥♥

あ♥♥♥

ほ♥♥♥

あ♥♥♥

ん♥♥♥

ん♥♥♥

ん♥♥♥

ん♥♥♥

ん♥♥♥



「はっ♡あっ♡いっ♡はっ♡あっ♡はっ♡」

「あんッ♡あっ♡はッ♡」

ギョッ♡

んっ♡

ん♡

っ♡

はっ♡

はっ♡

ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡

ゴキッ♡
ゴキッ♡

ス♡
ス♡

「はあッ♥ああッ♥あッすっ♥んっ♥」

「んんッ♥んはっ♥…あっ♥」

じゅわ♥
ちゃん♥
ぬる♥

ズ♥
ド♥
バ♥

マリさんは顔を歪ませながら
息を荒げきゆうきゆうと
ペニスを締め付けてくる
リサの中とはまた少し違う感触で
柔らかいが弱すぎない刺激が
いつまでも
挿入れていたくなるほど心地いい。

「んっ♡もうっ♡だめ…キちゃうっ♡」

は♡

は♡

あ♡

は♡

ん♡

は♡

「はっ…♡ぱっ♡ぱっ♡ぱっ♡」

ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡

ア♡

バ♡

ビ♡

グ♡
グ♡
グ♡

マリさんの膣内からどんどんと
愛液が溢れ出しぐちゅぐちゅに
なった膣内のあまりの気持ちよさに
僕もすぐに限界に達してしまおう



んあッッ♡

んあッッ♡

「んあッッ♡♡♡♡♡♡はッ♡あ…♡♡♡♡」

ビクッ♡

ビクッ♡

ビクッ♡

「アあッ♡♡♡♡♡♡はあッ♡♡♡♡♡♡あ…♡♡♡♡♡♡はあ…♡♡♡♡♡♡」

ぎゅ♡

ビク♡

ドブ♡

ドブ♡

ビク♡

「はあ……♡はあ……♡すごい……お腹あったかい♡」

「はあ……んっ♡……はっ……♡
リサもイっちゃった……♡」

マリさんの中から精液が溢れ出す
ふと見ると
二人は僕をじっと見つめていた



おわり